

## パルチザン／文学

——ハインリヒ・フォン・クライストの「チリの地震」——

林立騎

解釈はドイツの病である。

ジャン＝マリー・ストロープ

## 序

Werner Hamacherは、ハインリヒ・フォン・クライスト Heinrich von Kleist (1777–1811)<sup>(1)</sup>の短編小説「チリの地震」*Das Erdbeben in Chili* (DKV 3, 188–221) について、「テキストを歴史的、社会的、あるいは心理的連続性に嵌め込むことで経験の統一性を再構築しようとするいかなる解釈も、テキスト自体がナラティブな解釈批判であるために、持ちこたえられなくなる。このテキストが与える批判に耐える解釈とは、規則の適用によってテキストの損なわれた統一性を再構築しようなどと試みないものだけである」(Hamacher 1987, 172–173) と述べている。

実際、研究史を繙けば、「チリの地震」が一つの決定的な解釈に到達していないことは明らかである。あまりに多様な解釈をもたらしてきたために、このテキストは「方法論的・文学理論的手段の試金石」(Breuer 2009, 119) とさえ呼ばれる。それら解釈は大別して超歴史的解釈と同時代的解釈の2種類があるが、本論はまず前者の限界を示さねばならない。その上で、クライストが直面した歴史的現実を踏まえて「チリの地震」を論じる後者を検討する。クライストにとって文学とは、必ずしもただ「文化」の領域にのみ属すものではなかった。芸術は時にそれ自体で政治であり、戦争でさえあった。しかしその政治・戦争は極めて芸術的でもあったために、彼のテキストは、歴史的時間を与えられない限り、普遍的（すなわち無時間的）価値をもつ文学作品としても受容されてしまうのである。クライストは彼の時代にあっても、また現代から考えても、文学と特異な関係を結んだ人物である。それが最も複雑に現れている作品の一つ「チリの地震」を検討することによって、本論はクライストにおける文学と現実の関係を考察する。

(1) クライストのテキストに関しては、以下の全集を使用する。

Kleist, Heinrich von : Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. v. Klaus Müller-Salget. Band 3. 4. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt / M. 1990-1997.

以下ではDKVと略記し、巻数、頁数を記す。

## 1. 超歴史的解釈

物語は、1647年、チリの首都サンティアゴの独房で一人の青年が自殺しようとしている場面から始まる。家庭教師イエロニモは貴族の娘ヨゼーフエと身分違いの恋に落ち、二人は未婚のまま子を設ける。女は斬首刑を言い渡される。彼女が処刑台へと連れられて行く合図の鐘を聴き、独房にいる男は絶望して首を吊ろうとするのである。ところがその瞬間、大地震が起こる。倒壊する獄舎からイエロニモは逃げ出す。ヨゼーフエも処刑を免れる。彼女は混乱の中で息子を救い出す。三人は郊外の谷で再会する（ここまで第1段落）。翌日、三人はヨゼーフエの知り合いであるドン・フェルナンドの家族と顔を合わせるが、事件や処刑のことに触れる者は誰もいない。谷では地震を生き延びた人々が身分を問わず助け合い、全ての人間が「一つの家族」になったかのように支え合っている。二人は地震によって救われたと感じる（第2段落）。午後になり、地震で倒壊しなかった唯一の教会でミサが執り行われる。神に感謝するため、二人は参加する。しかし、ミサの冒頭の説教が始まると、司祭は地震と町の道徳的退廃の関係を指摘し、イエロニモとヨゼーフエの名を挙げてかつての事件に触れる。ミサに参加していた人々は彼らを見つけ出す。人々は次第に暴徒と化し、棍棒でイエロニモとヨゼーフエを殴り殺す。さらに二人の息子であるフィリップも殺そうと迫るが、取り違いからドン・フェルナンドの小さな息子が殺される。暴徒は消え去り、フェルナンドは残されたフィリップを養子に引き取る（第3段落）。

初出時には「イエロニモとヨゼーフエ 1647年のチリの地震の一場面」と題され、1810年に『小説集』の一編として出版された際「チリの地震」と改題されたこの物語は、現存する書簡から1806年末までに成立したと考えられているが、本文中の表現とクライストの私信に現れる表現の類似を考慮すれば、より精確には1806年秋に執筆されたと思われる。<sup>(2)</sup>しかし資料の不足から執筆の動機や意図が不明であり、またテキストそのものが多義的な解釈を許すために、論者・時代によって様々な解釈がなされてきた。

### 1.1 解釈小史

Friedrich Gundolfは、「チリの地震」にはクライスト個人の「運命」が表れていると論じた。Gundolfによれば、そもそもクライストの短編小説におけるおぞましい出来事や行為は「彼の魂の『光輝と苦痛』の符号」(Gundolf 1922, 166)である。クライストは、自らの「魂の持続的緊張状態」(ebd., 167)を弛緩させるために表現行為を必要とし、「サンティアゴの廃墟のなかにいる不幸な恋人たちを想像することで、自分〔クライスト〕自身を揺さぶる運命への激しい嘆きを和らげていたのである」(ebd., 168)。

(2) Vgl. DKV 3, 207 und DKV 4, 364, 366.

Hermann Pongsは、「チリの地震」を“愛の物語”として読む。地震という強大な力は「社会的な価値観を無に帰せしめ」、その結果、「社会的な価値観によって隠蔽され、また承認されずにいた、愛の絶対的な価値が、[...] それだけ一層純粋な輝きを放つ」(Pongs 1939, 152)。

Carl Otto ConradyとBenno von Wieseは神学的な解釈を呈示する。彼らにとって「地震」とは“神の語りかけ”であり、そこで問われているのは“神の声をいかに聞くか”ということである。Conradyによれば、物語の最後で暴徒と化す民衆は、神の声を聞かない者たちである。しかし主人公であるイエロニモとヨゼーフェも神の声を正しく理解したわけではない。彼らは神の声を自らに都合のいいように解釈したのであり、その点で彼らも誤った者たちである (Conrady 1954, 191–193)。一方Wieseは、重要なのはむしろ運命を受け容れることであるとする。「人間は、[...] 世界が下した処置にひれ伏すことを求められているのである。そうすることによってのみ人間は、[...] 理解しがたい神が何を望み、何を要求しているかということ聞き取ることができるのである」(Wiese 1961, 117)。

ジャン＝ジャック・ルソーの思想によってテキストを解釈したのはHans M. WolffやPeter Hornらである。Wolffは、ルソーの思想こそ「チリの地震」を支えていると指摘する。この物語においては、「社会的な不平等を非難し、階級差の無意味を暴き出すことが詩人の目標」(Wolff 1954, 42) である。本文第2段落のあらゆる人々が階級・身分を超えて「一つの家族」になったような光景では、「自然状態の平等が再建される」(ebd., 43) のだが、その状態は維持されない。「物語のおどましい結末は、人類の発達の中で社会の建設こそ最も取り返しのでない一歩だったというルソーの説への、極めて激しい同意の宣言」(ebd., 44) なのである。Hornによれば、「この短編の最後のシーンで荒れ狂うのは、[...] 文明によってすでに掣じ曲げられた人間の自然である。クライストの短編は、いかにして大衆の残虐性が煽動的マニピュレーションによって引き起こされるかをはっきりと示している」(Horn 1978, 114)。

## 1.2 評価・問題点

一連の解釈は、いずれもテキストの豊かな経験であることは疑いない。しかしこれらは論拠に乏しく、その主観的かつ創作的な側面を否定しがたい。全体の解釈が細部の解釈を基盤とするため、窮極的には主観を根拠と言わざるを得ない<sup>3)</sup>。それによって解釈する側の歴史的・文化的・政治的諸前提が強く反映されてしまう。それはそれとして意味あることだが、異質なも

(3) 例えばWolffは、「チリの地震」の本文を検討する際、クライストは「嫌悪をあらわにmit Abscheu「サンティアゴの淑女乙女の憤激」を描いている」(Wolff 1954, 42)、あるいは「軽蔑しつつmit Verachtung住民の歓びようを描写している」と論じるが、本文に「嫌悪」や「軽蔑」といった言葉は現れない。また、「嫌悪」や「軽蔑」の印象を与える表現がなされているとも言えない。「チリの地震」が「社会的な不平等と階級社会の批判」を目的としているというWolffの解釈は、こうした多分に主観的な読解の上に成り立っている。

の経験に芸術の価値があるとするなら、作品を飼い馴らすよりも異質さの源泉を異質なままに求めるべきだろう。以下においては、「チリの地震」を18～19世紀の文化的・政治的状况を参照しつつ、いわば外部のテキストとの接続をつくることで解釈する別の試みを検討する。

## 2. 同時代的解釈

### 2.1 地震

Dirk Grathoffによれば、クライストのテキストは1647年のチリの地震よりも、内容的にはむしろある別の「地震」に影響を受けている。それは1755年11月1日に起きたリスボン地震である。リスボン地震は、「おそらく1789年のフランス革命しか比較の対象たり得ないほどの重要性をもつ、18世紀の世界史的出来事」(Grathoff 2000, 100) だった。「世界史的出来事」たりえたのは、犠牲者が6万に達したといわれるその規模によってではなく、ヨーロッパに弁神論論争を巻き起こしたからである。ライブニッツに始まる弁神論は、個々の悪が全体の善につながると論じることによって、神が創造した世界に悪が存在することを正当化した理論だが、1755年11月1日の午前中、しかもミサの最中に起こった地震が30の教会で神に祈りを捧げていた人々を瓦礫に埋めたとき、この考え方には根底的な疑問符が突きつけられた。こののちヴォルテールやルソーが地震と信仰の関係について発言し、この出来事は神に対する信仰という、当時の人間にとっての大地を揺るがす大きなきっかけになった。Herald Weinrichはそれを「ヨーロッパ精神史の転換点」(Weinrich 1971, 64) と呼んでいる。

WeinrichとGrathoffはこの転換点において「チリの地震」を分析する。つまり弁神論論争を下敷きにして、地震と「悪」の関係を描いた物語として捉えるのである。当時、悪は自然悪と道徳悪の2種類に分けられていた。Weinrichは、「チリの地震」を道徳悪が原因となって自然悪が引き起こされる物語と解釈する (ebd., 74) が、その読解を批判的に発展させるGrathoffは、クライストにおいてはどちらがどちらに先行する、あるいは原因—結果関係となることが示されるのではなく、むしろ自然悪と道徳悪が相互に関係していることそのものが描かれていると主張する (Grathoff 2000, 109—110)。クライストは、「チリの地震」成立期とも近い1805—06年の小論「語りの中で思考が次第に出来上がることについて」*Über die allmähliche Verfertigung der Gedanken beim Reden*において、「物理的世界と道徳的世界の現象のあいだには奇妙な一致がある」(DKV 3, 537) と述べている。つまり「チリの地震」においては、自然悪と道徳悪の対応という根源的な関係性それ自体が問題化されており、クライストの考える世界の原理が示されているのである。「チリの地震」は、こうした形で弁神論論争という「哲学的議論の文脈への独特の参与」を試みたテキストである (Grathoff 2000, 110)。

## 2.2 革命

一方で、Helmut J. SchneiderとHelmut Koopmannは「チリの地震」をフランス革命のアレゴリーとして読み解く。Schneiderによれば、クライストの「地震」がフランス革命を意味していると読むことは、当時において全く例外的なことではない。そもそも革命は、繰り返し「自然災害」のメタファーによって語られてきた。言語表現において「フランス革命」は、嵐として、洪水として、雷雨として、そしてクライストにおいてのみならず地震として表象されてきたのである (Schneider 1987, 116)。したがってクライストの地震を革命のアレゴリーとして読み取ることには十分な理由がある。Koopmannもまた、地震によって「階級の枠が廃棄され」、「民主的平等」が達成されている以上、「チリの地震」の「具体的社会学的意味」はフランス革命でしかありえないと論じる (Koopmann 1990, 95)。ただし、「チリの地震」が示しているのは、そうした身分なき社会が持続されず、結局は古い秩序が再び支配することである。それはフランス革命の帰結としての王政復古を意味する。3段落に分けられた「チリの地震」は、内容的に1) 革命、2) 革命による階級の崩壊・民主的平等の実現、3) 旧秩序の再構築と捉えられる。1806年の執筆時には、フランスにおける事態はそこまで進行していなかったが、Koopmanによれば、「チリの地震」は革命の行く末に対する考えが表明された、クライストによる「彼のフランス革命史／物語」(ebd., 96)なのである。

実際、クライストは革命後のフランスに対して批判的な態度を示していた。パリに滞在した1801年夏の書簡にそれが表れている。バスチーユ襲撃記念日の祝祭の「品のなさ」を嘆いて、「フランス人は二言目にはルソーの名前を口にしますが、もし彼に向かって、これがあなたの仕事の成果だと言ったら、彼はどんなに我が身を恥じることでしょう」(An Karoline von Schlieben, 18. Juli 1801. DKV 4, 241)と述べ、さらに、「運命はこの国民をどこへ運んでゆくのだろうか？ 神のみが知るだろう。彼らは他のいかなるヨーロッパの国民よりも没落へと熟している」(An Wilhelmine von Zenge, 15. August 1801. DKV 4, 259)と書いている。こうした評価は、「のちの「チリの地震」の物語やそこで指摘される革命の帰結とあまりに精確に符合する」(Koopmann 1990, 104)。

## 2.3 評価・問題点

リスボン地震とフランス革命を軸としたこれらの解釈は、クライストの時代を考慮に入れることで解釈に新たな視野を開いている。クライストがリスボン地震とその後の弁論論争を知らずに「チリの地震」を執筆したとは絶対に考えられない。また、フランス革命の影響を受けずに第2段落の描写がなされることは不可能だったはずである。したがって、これらの解釈が「チリの地震」に含まれた要素を抽出していることは確実である。しかしながら、「チリの地震」がまず第一に弁論論あるいはフランス革命を扱ったテキストであると看做するのは困難だろう。なぜなら、

テキストの成立時期である1806年にそれらの問題を扱う必然性がないからである。ヴォルテールやルソーの議論を敢えてこの時期に引き継ぐ意味はどこにあるだろうか？あるいは、1801年のフランス滞在時の印象を5年経ってから小説にしなければならないだろうか？たしかに、一般に芸術家が自分の問題を発見したときには、その対象との時間的隔たりは何の障壁にもならないだろう。しかし他ならぬクライストにおいては、そのような態度は考えにくい。

### 3. パルチザン文学／パルチザンとしての文学

#### 3.1 愛国主義的文学運動

当時、活字メディアはその地位を変化させ、社会的に重要な新しい役割を担い始めていた。Gerhard Schulzによれば、その変化はフランス革命に由来する。「フランス人たちが試みた共和的政治形態において本質的に新しかったことは、言葉による統治、説得による多数派の獲得であった」(Schulz 1993, 60)。言葉と政治、言葉と社会のあいだに新しい関係が生まれていた。「言葉の全く新しい力を認識することによって、文筆家たちにも新しい課題が生じた。それは、読者の行動に直接の影響を及ぼすという課題である」(ebd., 60—61)。プロイセンにおいては、それは1806年以降のいわゆる愛国主義的文学運動として結実した。クライストもまた、1808—09年に雑誌Phöbusをドレスデンで出版し、1809年には挫折するものの雑誌Germaniaを計画、1810—11年の半年間は夕刊新聞Berliner Abendblätterを発行し、それぞれの時期に自ら多くの（政治的）文書を執筆することによって「読者の行動に直接の影響を及ぼすという課題」を果たそうとした。そうした態度を考慮するならば、「チリの地震」の考察において、クライストにとってテキストの成立時期である1806年が何を意味するのか、1806年の「読者」がいかなる状況にあったかということ、決定的な重要性を持つはずである。

#### 3.2 軍制改革とパルチザン

1806年10月、プロイセンはイエナ・アウエルシュテットの戦いでナポレオン率いるフランス軍に大敗した。その結果、1807年にティルジット条約が締結され、プロイセンは領土の半分を失い、残った半分にも15万のフランス兵が駐留することとなった。支払うべき賠償金は国庫収入の3年分だった。Volker Pressによれば、「クライストは、[...] 1806年のプロイセンの破局をおののきながら目の当たりにした」(Press 1993, 46)。1806年とは、そうした年だった。

敗戦後、プロイセンは国家レベルで軍制改革に力を入れていた。当時のプロイセンの軍制は、カントン制（将校＝貴族が出身地の隷属農民を徴募するシステム。貴族－農民関係がそのまま将校－兵士関係となる）を基礎としていたが、この制度には大幅な兵役免除規定があるため財産市民や教養市民は軍隊と関わりを持たず、兵士の社会的地位も非常に低かった。当時は「祖国の敵は軍隊の敵にすぎない」という通念が支配的だった（鈴木2008, 173）。つまり身分制に基づく弊

害に囚われていたのである。そこで1807年、シャルンホルストはまず、「国家のすべての住民は、その生まれながらの防衛者である」として一般兵役制の理念を説いた。一般兵役制、あるいは民衆による祖国防衛という考えそのものは以前からあった。1793年にはフランス国民公会で総動員令 *Levée en masse* が採択されていたのである。ただ、シャルンホルストら軍制改革者たちは、確かにフランス軍を通じて革命が生み出した「国民」の精神力を認識していたのだが、その爆発的な力がプロイセンの君主制と国内の秩序を脅かすことにつながってはならなかった。それゆえ彼らは「政府と国民の連帯」を謳い、国民のエネルギーを国家のもとに統率することを試みた。一般兵役制という形で「市民社会と軍事機構を統合することにより、国家による暴力の独占を擁護しよう」（丸島2008, 166–167）としたのである。

一方、在野の身でありながら、クライストもまた身分制に囚われない軍事行動を独自に構想していた。クライストは1809年に多くの政治的文書を著したが、そのうちの一つ「オーストリアの救援について」 *Über die Rettung von Österreich* の末尾に奇妙な「布告」を書き添えている。それは「偉大で強大な国民蜂起」(DKV 3, 501) を惹き起こすためにオーストリア皇帝が発すべき布告の提言であり、まさしく「読者の行動に直接の影響を及ぼす」(Schulz 1993, 61) ことを意図した言葉である。

余、オーストリア皇帝にして、自らの意志と神の助力によりドイツ人の再興者かつ臨時的統治者であるフランツ一世は、以下を決意し、またあらたに決意する。

- 一 この決意の日より、ドイツ帝国はふたたび存在すること。
- 二 16歳から60歳までの全てのドイツ人は、武器を手に取り、フランス人を国外へ追いやること。
- 三 武器を手にと祖国に逆らった者が捕捉されたときは、軍法会議にかけ、死をもって償わせること。
- 四 戦争終結後には諸階級が招集され、帝国普通議会において、帝国にはそれに最もふさわしい憲法が与えられること。(DKV 3, 501–503)

また、同じく1809年執筆された「ドイツ人の教理問答」 *Katechismus der Deutschen* 中にも、以下の一節がある。

問 それでは一個々人の義務とは何か。

答 直接皇帝の命令に応じて武器を手に取り、〔…〕フランス人たちを、どこで出くわそうと殴り殺すことです。(ebd., 488–489)

クライストがシャルンホルストら軍制改革者とは「国民」の力の使い方に関して異なる構想を抱いていたことは明らかである。クライストが提唱しているのは、国家の統率のもとに国民を動員することではなく、皇帝の命には従うものの武力行使に関してはいかなるコントロールも受けないパルチザンであり、いわば軍制改革者たちが危険視した、秩序を破壊しかねない存在状態の国民なのである。

1806年は、プロイセンにとっては屈辱的な大敗とフランス軍の進駐を意味し、クライストにとってはパルチザン思想と「読者の行動に直接の影響を及ぼす」意志が芽生えた時期だったのではなかろうか。Friedrich A. Kittlerが述べるように、クライストの「地震」とはフランスの「革命軍」であり、結末部分の民衆による暴力が示しているのはフランス軍に対する抵抗の戦術としてのパルチザン戦なのだが (Kittler 1987, 35)、そのときたんにパルチザンが表現の対象となっていると考えるだけでは片手落ちだろう。クライストはパルチザン戦を描くだけでなく、ある意味では自らがパルチザン戦を遂行しているのである。彼自身が、国家の統率を受けることなく、直接彼の武器を取って行動している。パルチザン文学はパルチザンとしての文学でもあった。

クライストがベルリン郊外ヴェンゼーの湖畔で自ら命を絶ってから1年半後、わずかな期間ではあったが国家の軍制がクライストの思想に歩み寄るような事態が生じた。

1813年4月のプロイセン王の勅令は以下の通りである。すなわち、国民は、侵入してくる敵に対し、あらゆる種類の武器を用いて抵抗する義務がある。手斧、熊手、大鎌、猟銃が明文で推奨される(43条)。プロイセン人は、敵の一切の命令に従わず、あらゆる手段を尽くして敵に損害を与える義務がある。たとえ敵が公的な秩序を回復しようとしても、敵に服従してはならない。なぜなら、それによって敵の軍事作戦が容易になるからである。「無規律な匪賊の放埒」は、敵が全軍を自在に操れる状態よりも有害でないということが、明文で言われる。パルチザンを保護するための報復とテロは保証されており、敵に脅威を与える。要するに、これはパルチザンのマグナ・カルタである。三つの箇所——序論、8条、52条——で、スペインとそのゲリラ戦争が「手本および例」として、明文で言及される。闘争は正当防衛の闘争として正当化され、「一切の手段を神聖にする」(7条)、つまり全体的無秩序を惹き起こすことでさえ神聖化される。(Schmitt 1963, 47-48)

この勅令に示されているように、「無規律な匪賊の放埒」までもが許された時代の作品として「チリの地震」は読まれねばならない。棍棒で主人公を殴り殺す民衆が描かれたのは、国家が公式に「手斧、熊手、大鎌、猟銃」など「あらゆる手段を尽くして敵に損害を与える」ことを義務づけた時代、「全体的無秩序を惹き起こすことでさえ神聖化され」た時代だったのである。



#### 4. 結 論

Hans-Jürgen Beckerは、クライストの小説における法学的要素を考察した論文において、クライストの文体は報告書を模範にしていると述べている。報告書の本質とは何か。報告書とは、「それを読んだだけで決断が下せる」文書のことである (Becker 1993, 76)。少なくともその人生の一時期において、クライストにとって文学の可能性とは、それを読んだだけで現実の読者が現実の決断を下すことができることではなかったか。「チリの地震」を弁論論争への参加やフランス革命の評価として解釈するとき、クライストのテキストは精神史の中の出来事として捉えられていた。しかしながら、文学史・演劇史・精神史といった枠組みだけではクライストは捉えきれない。クライストにおける文学は、たんに言葉のための言葉にとどまらず、より具体的で現実的な目標をもちえたからである。1810年に出版されたクライストの『小説集』は、オーストリアでは検閲を通らず発禁処分を受けたが、その事実はクライストにおける文学と現実の関係を逆説的に表している。検閲の書類には以下のように記されている。

1810年、ウィーン検閲所に小説集第一巻が提出された際、検閲官レッツァーは無条件の発禁処分を申し立て、検閲局はこれを許可した。理由は以下の通りである。内容は無価値とは言えないにせよ、道徳に反する箇所を看過することはできない。それはとりわけ短編小説「チリの地震」に現れており、その結末は極度に危険である。(Sembdner 1977, 620–621)

クライストの「チリの地震」がいかなる可能性をもったテキストか、同時代の検閲局は確実に見抜いている。彼らは、クライストにおける芸術が同時に政治であり、戦争であり、「チリの地震」に描かれた「結末」が現実の秩序を破壊しかねない「極度に危険」なものであることを、はっきりと認識していたのである。

## 引用文献

## 〈外国語文献〉

- Becker, Hans-Jürgen: Adoption-Verlöbniß-Ehe. Die zivilrechtliche Einbindung des Individuums bei Kleist. In: Kleist-Jahrbuch 1993, S. 75-88.
- Breuer, Ingo (Hrsg.): Kleist-Handbuch. Stuttgart 2009, S. 114-120.
- Conrady, Karl Otto: Kleists "Erdbeben in Chili." Ein Interpretationsversuch. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift 35 (1954), S. 185-195.
- Grathoff, Dirk: Die Erdbeben in Chili und Lissabon. In: Ders. Kleist: Geschichte, Politik, Sprache. Aufsätze zu Leben und Werk Heinrich von Kleists. Wiesbaden 2. verbesserte Auflage 2000, S. 96-111.
- Gundolf, Friedrich: Heinrich von Kleist. Berlin 1922, S. 152-168.
- Hamacher, Werner: Das Beben der Darstellung. In: Positionen der Literaturwissenschaft. Acht Modellanalysen am Beispiel von Kleists "Das Erdbeben in Chili". Hrsg. von D. E. Wellbery, 2. durchges. Aufl., München 1987 (1. Aufl. 1985), S. 147-173.
- Horn, Peter: Anarchie und Mobherrschaft in Kleists "Das Erdbeben in Chili". In: Ders. Heinrich von Kleists Erzählungen. Königstein / Ts. 1978, S. 112-133.
- Kittler, Friedrich A.: Ein Erdbeben in Chili und Preußen. In: Positionen der Literaturwissenschaft. Acht Modellanalysen am Beispiel von Kleists "Das Erdbeben in Chili". Hrsg. von D. E. Wellbery, 2. durchges. Aufl., München 1987 (1. Aufl. 1985), S. 24-38.
- Kleist, Heinrich von: Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. v. Klaus Müller-Salget. Band 3, 4. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt / M. 1990-1997.
- Koopmann, Helmut: Das Nachbeben der Revolution. In: Deutsche Romantik und Französische Revolution. Hrsg. von Gerard Kozelek. Wrocław 1990, S. 85-108.
- Pongs, Hermann: Bild der Dichtung. 2. Bd. Marburg 1939, S. 105-109, 150-166.
- Press, Volker: Das Ende des Alten Reiches und die deutsche Nation. In: Kleist-Jahrbuch 1993, S. 31-55.
- Schulz, Gerhard: Von der Verfassung der Deutschen. Kleist und der liberalistische Patriotismus nach 1806. In: Kleist-Jahrbuch 1993, S. 56-74.
- Schmitt, Carl: Theorie des Partisanen. Berlin 1963.
- Schneider, Helmut J.: Der Zusammensturz des Allgemeinen. In: Positionen der Literaturwissenschaft. Acht Modellanalysen am Beispiel von Kleists "Das Erdbeben in Chili". Hrsg. von D. E. Wellbery, 2. durchges. Aufl., München 1987 (1. Aufl. 1985), S. 110-129.
- Sembdner, Helmut (Hrsg.): Heinrich von Kleists Nachruhm. München 1977.
- Weinrich, Herald: Literaturgeschichte eines Weltereignisses. Das Erdbeben von Lissabon. In: Ders. Literatur für Leser. Stuttgart 1971, S. 64-76.
- Wiese, Benno von: Heinrich von Kleist: Das Erdbeben in Chili. In: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft 5 (1961), S. 102-117.
- Wolff, Hans M.: Heinrich von Kleist. Die Geschichte seines Schaffens. Bern 1954, S. 41-46.

## 〈日本語文献〉

- 鈴木直志「プロイセン軍制改革——概観と展望」清水多吉・石津朋之編「クラウゼヴィッツと『戦争論』」、彩流社、2008年、169-192頁
- 丸島宏太「クラウゼヴィッツと一般兵役性の時代」清水・石津編「クラウゼヴィッツと『戦争論』」、147-167頁